旧脇本陣

空間的評価

旧脇本陣の魅力を復活させる

千葉大学教授　福川裕一

小諸市市町に位置し、重要文化財小諸本陣と 5 軒おいた東に位置する。江戸時代は脇本陣であり旅籠で、明治以降も旅館業を営んでいた。敷地は間口 15m、奥行 50m あり、裏町まで突き抜けている。この敷地に主屋とはなれが中庭を挟んで配置されており、はなれの東には間口 2 間、奥行 3 間の土蔵が並んでいる（今回は、土蔵の内部は実測していない）。主屋は江戸後期の建築と見られ、はなれは上級の客用に明治時代に増築された（ナショナルトラスト報告書）この建物はそれ自体が、江戸期に建設された脇本陣の遺構として旧態をよくとどめ貴重であり、その後、旅籠、旅館と変遷して来た変化を物語るきわめて興味深い建物である。さらに、重要文化財の小諸本陣と並び、宿場町の主要な施設がワンセット揃っている点でもきわめて貴重である。重要文化財の小諸本陣は、この脇本陣があることでその意味や価値が大幅に引き上げられるのである。そして、本陣と脇本陣の間には、背後に酒造蔵を擁する山謙酒造が立地する。これら大型の建物が集中する市町は、小諸市の歴史環境スポットのひとつとしてはかりしれない価値を有する。まず、脇本陣・久米屋の保存活用に手をつくし、さらに山謙やその他の町家も含め、市町全体を歴史環境スポットとして整備していくことが、歴史的文化財と小諸市民の記憶を守るという点からも、また観光政策という点からも欠かせない事業である。

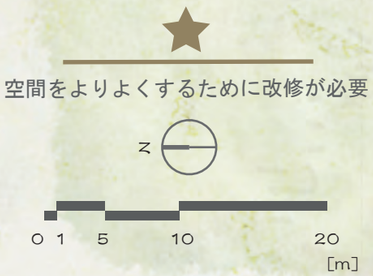
2014/06/13　発行
作成者：千葉大学福川研究室一同

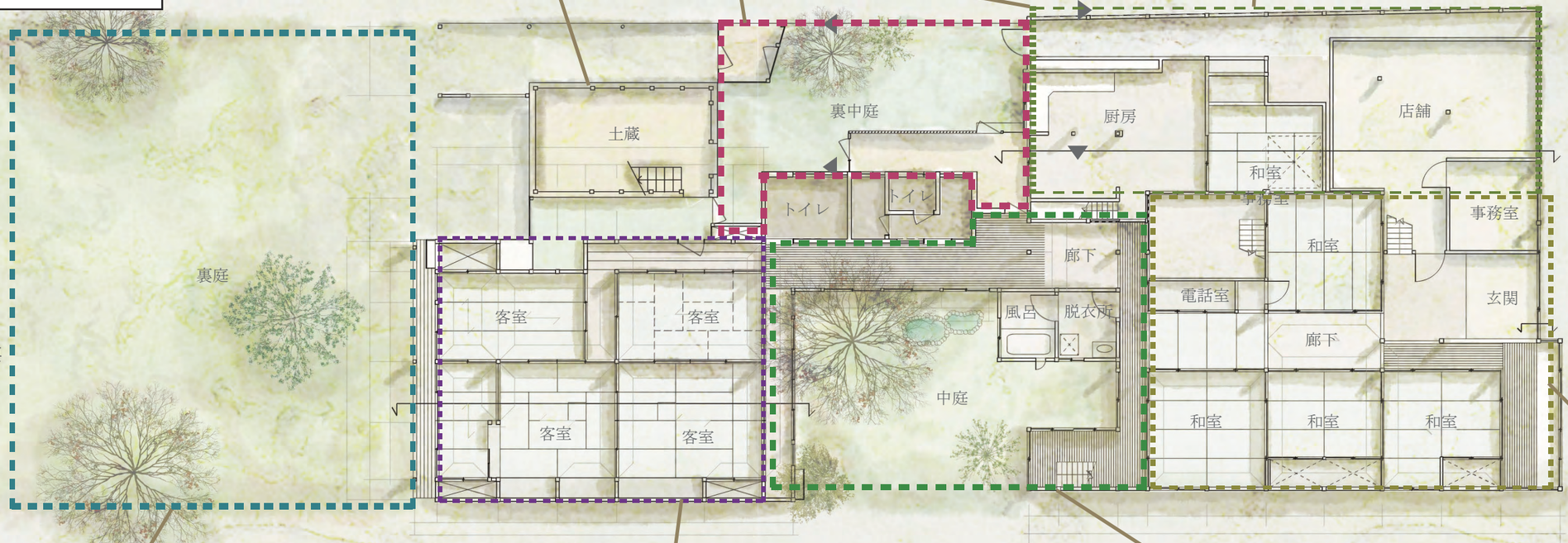
旧脇本陣の建物の評価

★★★
現状でも多くの魅力があり、
そのままの空間を利用できる

★★
このままでも十分活用できるが、
改修を行う事で魅力を引き出す

★
空間をよりよくするために改修が必要





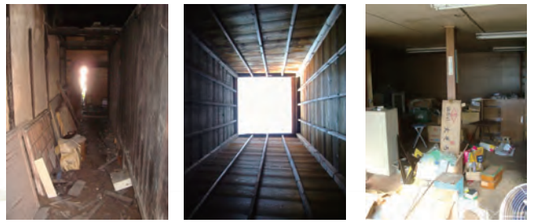
★★ 土蔵

間口２間、奥行３間の土蔵。後の改造で側面に出入り口が穿たれ、２階の正面にガラス窓が設けられた。比較的簡易な構造の建物であるが、裏中庭に君臨する位置にあり重要。正面の下屋を作り直し、裏中庭を前庭として一体的に整備。内部は、閉じられた土蔵の空間をいかした利用をしたい。

★★ 裏中庭

現在はサービスコートのようになっているが、物干が設けられていることからも分かるようにかなり明るい。物干を取り払い、土蔵とその下屋を整備することで、土蔵の前庭としての性格を強める。表のカフェの客がトイレへ行く動線にもなる。

★ 台所・店舗



表側は小諸図書教材の事務室として使われていた。本来は通り土間へつづく前土間で、座敷側には現在応接セットが置いてある板間が続いていたと思われる。台所と事務室の間には、高い天窓を備えた仏間がある。土間側に引き戸が遺っており、その正面に大黒柱がある。主屋の中ではもっとも新しい改造が行われている場所だが、以前の構造は遺されている。

★★★★ 母屋

桑屋が脇本陣であり旅籠であった江戸時代後期の建物。正面は、二階の手すりのあるテラスが庇代わりに道路へ突き出す出桁づくりで、登り梁で支えられた深く低い屋根とあわせかなりカッコ良い。中間の看板を下げるまねき屋根が、ややもすれば単調になる7間半という間口のアクセントになっている。改造箇所は多いが、その改造をたどって思いを巡らせること自体が楽しい。

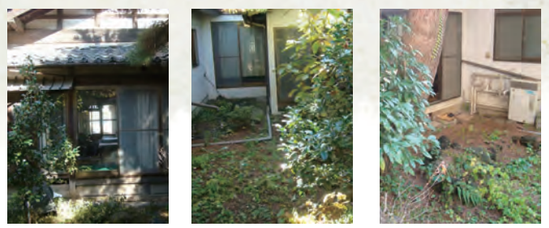
★★ 裏庭

かつては庭の設えがあったようだが、今は荒れている。北庭なので、養蓮寺と遠景の山並みの日のあたる正面が見え、とても美しい。庭も整備すれば、植栽の日のあたる面が正面から見えることになる。裏の道より少し高いので、喧噪は避けることができる。山並みを借景する庭園として整備、庭を楽しむテラスにしたい。

★★★ はなれ

明治時代に増築された。中庭と裏庭に妻を見せる。材は太く、床の間。違い棚、書院なども設えられた立派な建物。基本は四つ間取り（田の字型）だが、部屋の独立性を高めるために後に廊下が設けられている。北側の小さい二室は庭を楽しむための部屋。　これを活かすためにも裏庭の整備は重要。

★★ 中庭



表から主屋を抜けて中庭に至ると、はなれの豪壮な妻が中庭の樹々に見えかくれし、低い主屋との対比にハッとする。前回の調査では、風呂のほか客室なども増築されていたようだが、今は取り払われだいぶスッキリしている。さらに風呂は別に設けることにして整備すれば、すばらしい中庭になること請け合いである。

★★★ 母屋裏二階

中庭沿いに廊下を設け部屋が並ぶ。表二階と異なり天井が高い。一階のカッテやチャノマと箱段で直結し、家族の居住空間として使われたと思われる。内側の壁に掃き出しの小窓がついていて、一階の表側の天井の高い座敷の様子を見ることができる。家人が客人の様子をうかがうための仕掛けと思われ、とても興味深い。

旧脇本陣

改修案 Ver.1

～ CONCEPT ～　　改修概念

元々の建築空間が歴史的にも空間的にも魅力があるため、いかに既存の空間を活かしていくかに重点をおいた。本設計では母屋をコミュニティ施設、離れを宿泊施設として整備する事で小諸市の歴史的風土を体験しながら宿泊できる宿泊施設としての用途を提案する。また、宿泊客だけではなく、周辺住民の方々の施設としても解放し、銭湯やカフェ、バーとして人と人を繋ぐような用途を考えた。また、本提案で完成ではなく、地域の方々の意見、ご要望に対して改変の余地が大いにあり、これらの意見と折衷しながら本提案を完成させていきたい。

福川研究室　設計担当一同

旧脇本陣の活用提案（町屋ステイ）

■大きな風呂

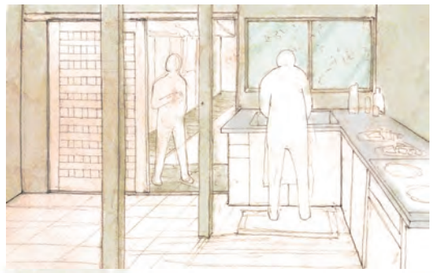
旅の疲れを癒す大きなお風呂。
宿泊者だけではなく地域住民の方々も利用できる地域密着型の銭湯。

■休憩スペース

お風呂上がりに裏庭の風景を眺めながら、涼む休憩所。本館とは分離し、あずま屋の様な空間を作り出す。

■空間を繋ぐ中庭

トイレ・銭湯・カフェを繋ぐ中庭。
雨の日・晴れの日・曇りの日
日本の庭園は表情を変え私たちを導いてくれる。



■香り漂う厨房

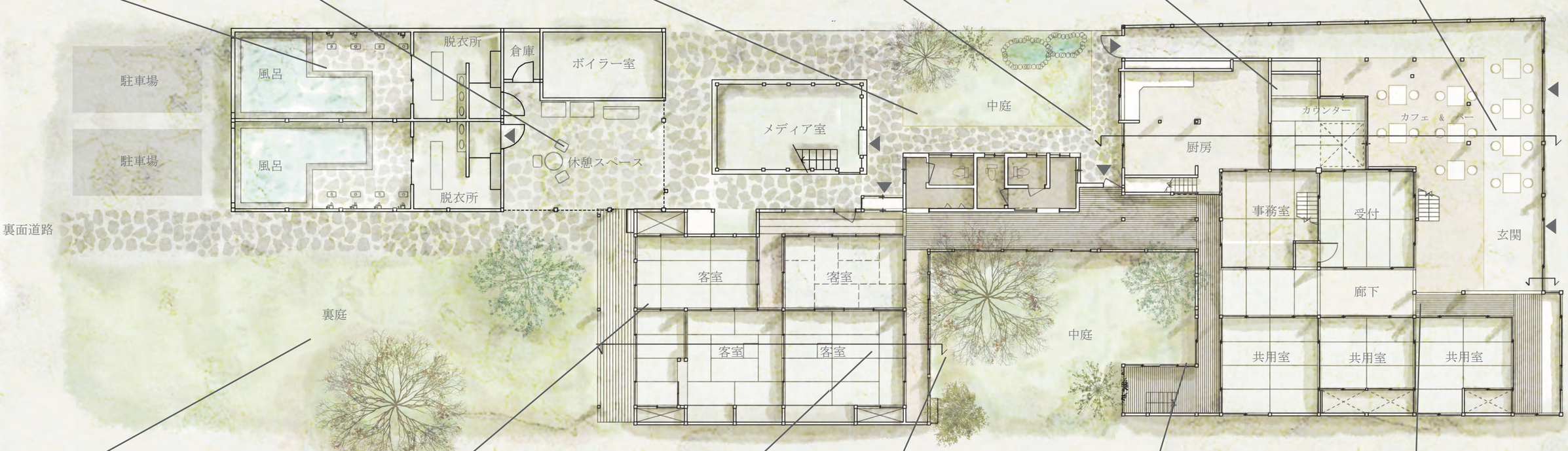
現在の厨房スペースを活用。
庭から表の通りまで料理の匂いが広がり、行き交う人たちが今日の献立をイメージする。

■賑わうカフェ＆バー

正面からおもてなすカ。フェ＆バー。昼は地元の方々が集うカフェへ。夜は宿泊客みんなで賑わう大人のバーへ。

■歴史ある外観

歴史的な町並みを形成していた外観。
深い屋根と魅力的な空間は道行く人を魅了し、誘い込む。



■借景を眺める裏庭

隣の古民家や奥に見える山々に囲まれる。裏庭時には外でバーベキューも良いかもしれない。

■落ち着きのある客間

昔は大名が宿泊していたと言われる客間障子が切り取る外の開放的な風景は旅の一時を忘れる落ち着きのある空間となる。

■憩いの縁側

宿泊者の憩いの縁側。縁側でお茶をしたり、将棋をしたり、昼寝したり、季節の表情の変化を楽しみながらくつろげる憩いの空間。

■集う中庭

すべての部屋から眺める事の出来る中庭。人がよってくる事で連鎖的ににぎわいを生む空間。

■イベント時の共用室

地域の方々と一緒になって日常を楽しくしていく場所。人数や用途に合わせて柔軟に用途を変え、様々な出来事の起点となる。

■開いた縁側

障子を解放し、にぎやかさを外部に表出する。近所の方々とお話ししたり、ゆっくり外を眺めたり、外部と内部を繋ぐ縁側。